

立効散の使用が摂食時の疼痛緩和に有効であったヘルペス性口内炎の1例

加藤 崇雄, 金子 貴広, 堀江 憲夫, 下山 哲夫
埼玉医科大学総合医療センター 歯科口腔外科 (埼玉県川越市)

リッコウサン
立効散は歯痛、抜歯後の疼痛の緩和に効果があるとされる。今回われわれは、ヘルペス性口内炎の摂食時疼痛改善に有用であった1例を経験したのでその概要を報告する。

症 例: 29歳, 女性.

既往歴・家族歴: 特記事項なし.

主 訴: 舌の疼痛.

現病歴: 2日前, 舌の違和感に気づくも放置. しかし疼痛, 39℃の発熱が生じ某内科受診. 経口薬の抗生剤処方されるも悪化し, 点滴を施行されたがさらに悪化したため当科受診される.

現 症: 舌背に白色の易剥離性の白板を認め, 軟口蓋に数個のアフタ性潰瘍を認めた.

処置および経過: 口蓋部のヘルペス性口内炎と診断し, 抗ウイルス剤の投与, および粘膜からの二次感染の可能性もあり抗生剤の経静脈的投与を行った. 発熱は改善に向うも患部は疼痛が強く, 摂食困難のため, 疼痛の緩和に立効散の使用を試みた.

投与方法: 立効散 (TJ-110) 7.5g/日分3, 食直前に服用させた. 内服前のWong-Bakerの疼痛スコアは3であったが, 内服直後のWong-Bakerスコアは1に改善した. しかし食間のスコアは2~4であった.

考 察: 今回用いた立効散には甘草, 升麻, 竜胆, 細辛, 防風が含まれており, 中でも細辛には鎮痛, 局所の表

面麻酔効果があるとされる. 本症例でも立効散により服用した直後から疼痛の改善が認められ, 効果持続時間は比較的短いものの, 粘膜炎における食事時間中の疼痛改善に極めて有用であった.